

徒然なるままに…52

ー全体授業研⑤…エピソードから「気付き」を高めるー

平成28年12月6日
白島小学校 研修部

はじめに

12月を迎えました。以前は、忙しい中にも、押し迫った感を徐々に感じましたが、ここ何年かの間に、それすら感じる事のない、ごく日常的な日々です。よっぽど、忙しいのでしょう。まあ、11月から12月に掛けては、次から次へと、まさに殺人的なスケジュールで行事が進んでいますから。



第5回の全体授業研は、2年の先生方の提案でした。特に、授業者の本田先生は、今年初めて担任として教壇に立たれたにもかかわらず、授業提案に果敢に取り組みました。単元構成から本時の展開について、時間を掛け、地道に授業づくりされる姿に、感心させられました。

さて、今回は、協議会でも話題になった、生活科授業における「エピソード」と気付きを高めるための思考について一考して、今回の授業を振り返りたいと思います。もう一つ、これも、協議会で話題になった、地域の人とのつながりを持つための教師の手立てについて、私の経験から少しお話できればと思います。



1 活動の中から生じた「エピソード」と(科学的な)思考

今回の授業のキーワードとなったのは、「つながり」でした。店・施設での体験やかかわりを通して、それらとの、ひいては、地域とのつながりを量的、質的に高めることがねらいでした。

まず、子どもは、店・施設での具体的な活動によって、いろいろな経験をします。そこで生まれるのが「エピソード」です。エピソードとは、ものやその様子、働きぶりなどといった「見えるもの」と同時に、施設・店の人の工夫、仕事への思いやこだわり、子どもの抱いた感情や疑問などの「見えないもの」が体験ストーリーに乗せて語られるものです。そこで、「なぜ。」とか「どうすればいいか。」と問い、社会のつくりや仕組みといった、さらに「見えないもの」に気付きを高めていく展開を仕組むことが必要だと考えられます。そして、これらの学習を通して、施設・店とのかかわりが高まり、深まった(=成長した)自分に気付くことができると考えられます。

今回、エピソードから気付きを高める思考を支援するために、「コンセプトマップ」(前頁[資料1])を活用されました。これは、自分たちと地域にある店や施設とのつながりを振り返り、まとめるために活用されたものです。今回のメリットとして、次の二つが挙げられるでしょう。

一つ目は、本時の子どもの思考の構造化を図ることができたことです。単に店や施

設での体験を通して得た気付きから、子どもは、どんなもの・ことがどのように提供されているのか、そこには、どんな思いや意図があるのかというつながりの意



〔資料1：「コンセプトマップ」〕

味について考えることができました。また、それぞれの施設・店とのつながりを「比較（類比）」することによって、それらが自分たちの生活を支えているという共通点に気付くことができました。このように、ワークシートを完成させていく過程が本時の思考の過程であり、これらの思考は、施設・店と自分たちとのつながりという学習内容の構造に基づいています。

二つ目は、「関係付ける」、「比較（類比）」という思考の仕方、言い換えれば、見方・考え方を学習できたことです。物事を関係付けて、その意味を考えたり、関係付けることによって、物事の全体を構造としてとらえたりすることは、思考をする上で大切なことです。2年生なりに、その基礎として経験したことは、意義のあることだと思います。

「コンセプトマップ」の活用は、「思考スキル」とそれを支援するための「思考ツール」を基に考えられています。子どもの思考を促すことを目指した本校の授業づくりにおいて、示唆を与えられるものではないでしょうか。



2 地域の人とのつながりを持つための工夫

ここで、地域を始め、人材を授業に取り入れる工夫についてお話ししましょう。これは、これまでの経験から感じた私の我流ですので、参考までに。

まず、その方と仲良くなることです。取材の際、話を伺った上で、ここが興味深いとか、こんなことを考えさせたいなど、授業の話やその他の合う話題の話を繰り返しながら、仲良くなります。迷惑にならない程度に、授業のために厚かましくお願いしている中で、考えていないような資料や活動が舞い込んでくることもありました。

次に、話してもらう内容は、こちらでじっくりと精査する必要があります。ここでしてもらう話は、資料です。だから、情報の取捨選択をするのは、当然のことなのです。「～について、〇分で話してください。」と具体的にお願いしたり、事前に話を聞いた上で、こちらが原稿を書き、読んでもらうという方法もありだと思います。聞き取りを重ねていけば、こちらの意図と思いが伝わり、ぶれない話をしてくださるのではないかと思います。

授業で、一方的にゲストに話していただくだけでは、もったいないです。子どもは、きっと、ゲストの心情に共感し、いただいたメッセージに答えたいとか、もっと聞きたいとか思うはずです。そこで、インタビュー形式で子どもと直接やりとりできるよ

うにしたり、感じたことを子どもからメッセージとして送り、さらに、ゲストに話していただくなど、子どもとゲストが行きつ戻りつする活動を取り入れてはどうでしょうか。

こうした人材の方は、私たちにはない、専門性と熱意をもつ「ホンモノ」です。そこには、子どもの感動と学びがあります。ぜひ、子どもにすばらしい出会いをさせてください。

おわりにー授業力を高め続けるために

先日、「広島県小学校社会科教育研究大会」に出掛けた際(次号で報告いたします。)、木村博一先生の講話に、「技術力」についての話がありました。それは、教材で取り上げられていた伝統工芸が高級な筆をつくり続けるのも、地域の技術者が新製品を開発し続けるのも、自分たちの職人の技、技術力を向上させ続けようという、まさに「イノベーション」の精神があるからだということでした。これは、私たち教師にも言えることではないでしょうか。

時々、指導案を書いたり、授業公開したりすることを「大変なこと」と言われるのを聞くことがあります。本当に、「大変なこと」なのでしょうか。

授業研究とは、子どもに付けたい力を付けるためには、どのような教材を取り上げ、どのような内容をどのような活動や学習で身に付けさせるかを考えて実践し、その確からしさを反省的に吟味することです。言わば、私たち教師が日常的にしている、しなければならない仕事であり、役割です。その精度を上げるための訓練が研究推進であり、これを積み重ねることによってこそ、授業力が高まっていくのではないのでしょうか。

本田先生は、自ら授業者を買って出られ、初めて独りで総案まで書かれたと聞いています。指導要領を中心に文献を検討し、ご自分のしたいことを持ち、試行錯誤しながら授業づくりを進められたことこそが自分を高める「挑戦」と言えるでしょう。私も、負けずに、「イノベーション」し続けられる教師でありたいと思いました。

